



THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN
弘前大学附属図書館報 No.27 2008.3

目次

巻頭言 図書館で友に会う	1
特集 『言語力』大賞コンテスト	2
図書館への声 学生アルバイトから見た図書館	14
lead-off インターネットシナプス	18
lead-off 本との出会いを楽しむ	19
lead-off 弘前大学出版会より本の紹介	21
lead-off 弘前大学学術情報リポジトリについて	23
lead-off Scopus 中止に伴う代替 DB の紹介	25
学術講演会・会議・総合文化祭報告	27
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧	31

図書館で友に会う

附属図書館長 正村 和彦



大学に入って良いことは、新しい友を得ること、新しい先生に出会うこと、新しい関心事に出会うことである。大学にはもう一つの出会いがある。図書館には数万冊の本がある。これらのそれぞれには、日本の、世界の深く思索した人のどうしても言わなければならない言葉が記されている。大学で直接会える人の数と種類は少ないが、図書館でははるかに多くの多様な人々に接することができる。一生の伴侶とする本に出会う幸運な人もいる。人と付き合う時、お互いに好き嫌いがあるが、本の場合相手は決して自分を嫌うことはない。お付き合いしたくない日は、その辺にほっておけばよい。数年間その存在を忘れてしまっても本は怒ったりしない。私にもこのような友が数人いる。この中にはノーベル賞受賞者もいる。だがその名は明かさない。

(しょうむら かずひこ)

特集「言語力」大賞コンテスト

平成17年度から始まった弘前大学学生『言語力』大賞コンテストは、学生の皆さんに『言語力』を養ってもらおうという意図の元に附属図書館主催で行われているものです。

第1回（平成17年度）、第2回（平成18年度）、第3回（平成19年度）の受賞者は下記の通りです。受賞作品及び講評を、弘前大学附属図書館ホームページに載せていますので、興味のある方は是非ご覧ください。

[第3回受賞作品URL]

http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop//gengoryoku/gengoryoku3_sakuhin.html

（上記URLから、第1回・第2回にもリンクしています）

第1回（平成17年度）弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト 受賞者一覧

部門	賞	学部	学年 ^(注)	氏名	タイトル
I 文学作品部門	大賞	人文	3年	斉藤 大輔	ゴドフリー・デリック の憂鬱
	優秀賞	農生	1年	龍田 和幸	思い出せ
	〃	医	1年	福地 香	雪御伽
	佳作	人文	1年	市毛 春奈	水中楽園
	〃	人文	3年	若林 由来	旅の石
	〃	教育	3年	渡部 知也	カレン
	〃	理工	3年	平塚 晋也	西日と葡萄
II 評論部門	応募作品なし				

※（注）学年は、受賞時における学年です。

応募総数12点（I文学作品部門12点、II評論部門0点）

第2回（平成18年度）弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト 受賞者一覧

部門	賞	学部	学年 ^(注)	氏名	タイトル
I 文学作品部門	大賞	人文	1年	早坂 美春	葬式パレード
	優秀賞	人文	4年	澤岡 結	ぼくの、愛すべき家族へ。
	佳作	人文	1年	三浦 南	夏の地蔵
	〃	人文	4年	若林 由来	なつ、みどり。
	〃	教育	4年	渡部 知也	夏のつがい
	〃	農学生命	3年	洞口 拓	違った視点
II 評論部門	応募作品なし				

※（注）学年は、受賞時における学年です。

応募総数14点（I 文学作品部門14点、II 評論部門0点）

第3回（平成19年度）弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト 受賞者一覧

部門	賞	学部	学年	氏名	タイトル
I 文学作品部門	大賞	該当作品なし			
	優秀賞	人文	2年	三浦 南	もじおと
	佳作	人文	3年	公平 克彦	クライモン
	〃	人文	3年	和田 大	闇色の願い
	〃	理工	2年	千頭 昇	みんなのががく
	〃	理工	2年	林 正隆	子供の社会
	〃	理工	3年	岡田 俊彦	アンラッキー・ピープル
	〃	農学生命	4年	飯田 浩	薄暗い中で
II 評論部門	大賞	該当作品なし			
	優秀賞	該当作品なし			
	佳作	理工	2年	齋藤 学	主体性を育てる教育とは
	〃	医	4年	大内 衆衛	情報・通信技術の進展と主体の消失

応募総数31点（I 文学作品部門26点、II 評論部門5点）

第2回『言語力』大賞コンテスト

言語力大賞コンテストについて、

思ったこと、感じたこと

第2回大賞受賞 人文学部2年 早坂美春



私がこのコンテストを知ったのは総合教育棟の掲示板でした。ポスターを見たのはちょうど夏休みの前あたりで、時期的にはちょうどいいと思ったのです。そのとき私は大学の文芸部に所属していて、部活の先輩から「どこか賞に送って見たら？」と言われていました。でも私は文学賞にどんなものがあるかなんてまったく知らなかったので、公募ガイドを買ってみたり、パソコンで検索してみたりして探していましたが、なかなか良い条件のものが見つかりません。やはり私には無理だと思っていたら、偶然言語力大賞コンテストの募集を見つけたのです。まず募集されている作品の規定の文字数が魅力的でした。四千字ということは原稿用紙十枚。そのときそれほど長い小説を書いたことがなく、また長いものを書き上げる自信もなかった私は、その短さに惹かれました。それに主催が弘前大学附属図書館ということでやはり安心感がありましたし、しかも副賞の図書カードの金額が高額で驚きました。普段は文庫本しか買えないけど、もし図書カードがもらえたらハードカバーも買えるよなあ、すごいなあ、とそんな風に思い、応募することに決めました。

よし、やろう、と決心したのはいいものの、ほかの人たちがどういう作品を送っているのが非常に気になりました。文芸作品という大きなくくりだったので、もしかしてほかの人は詩や俳句を送っているかもしれない、私だけが小説かもしれない、と不安になったのです。もちろん文芸作品ということなので、小説でも詩でも短歌でも受け付けてはくれるのですが、それでもひとりだけ違うジャンルというのとはなんとなく嫌でした。やはり違う形式のものを比べて優劣をつけるというはすごく難しいことだと思うのです。どうしてもたくさん送られたジャンルに目がいきますし、小説よりも詩が好きだというような審査員の嗜好が入るかもしれません。きちんとした審査員の方々なので私の杞憂だとわかってはいるのですが……。それから募集要項のページに審査員が言語力大賞コンテスト実行委員会委員とあったのですが、その委員の方が大学の先生なのか図書館の職員の方なのかそれとも学生なのかと一瞬考えてしまいました。審査員の方がわかったからどうするわけでもないですが、きちんと書いてあるほうが信頼できるような気がします。それからもうひとつ、私がこうしたほうが良いと思う点があり

ます。もっと宣伝すること、です。私が賞をいただいた後に、「そんな賞があるなんて知らなかった。応募したかった」という人が何人かいましたし、友達のほとんどは「言語力大賞コンテスト？ なに、それ？」という感じでした。掲示板には掲示されていたし、ホームページにも載っているのですが、応募作品の数を増やすにはもう少しいろいろな場面で宣伝をすることがいいような気がします。たとえば学食にも目立つようなポスターを貼る（学食は生徒がたくさん集まるから自然と目に付く）とか、生協の本売り場にもポスターを貼らせてもらう（本が好きな人なら応募してみようと思うかもしれない）とか。

なんだか偉そうなことを書いてしまいました。特に手続きでは不便だと感じたことはありませんでした。上の意見は、こうしたほうがもっと良くなるのでは、という点です。言語力大賞コンテストは次で三回目というまだ新しい賞ですが、少しでもこの意見が賞をより大きく知名度のあるものにするお手伝いになれば幸いです。

（はやさか みはる）

「言語力」大賞コンテスト審査員を経験して

第2回言語力大賞実行委員 人文学部 奥野 浩子



軽い気持ちで引き受けた第2回『言語力』大賞コンテストの審査員でしたが、応募作品を前にして後悔しきりでした。学生の創作力や表現力が想像以上だったのです。学生のレポートや試験の答案を読んでいて『これで大学生の文章なの？』と、出るのはため息ばかりという経験が多かったからです。

応募作品を読んでいて「審査する」ということが「優劣をつける」ことであるということに改めて当惑し、できるものなら審査員を辞退したいと思いました。それでも引き受けた以上は、自分なりの観点で序列づけをすることにし、まず、「物語の展開が自然かどうか」を私なりの基準で二種類に分け、次にそれぞれの中で「表現力」により序列づけをするという方法をとりました。とにかく苦痛を伴う過程でした。時に自分の大学時代が思い出されたり、文章から色彩が浮かんできたりして、審査を忘れて感心させられる作品もありました。苦痛を伴う審査員経験でしたが、無からの創作に挑む学生が存在することを知ってホッとしたのも事実です。

今後もこのコンテストを続けていくために、いくつか提案をしたいと思います。まず、審査員の資格を明示していただくこと。実は、私は最後まで『私が審査員でいいのか？』という疑

問がぬぐいきれませんでした。外部の著述家を審査員に招くところまでは必要がないかもしれませんが、作品を募集するにあたり、応募作品を審査する審査員の資格も明示する必要があるように思います。さらに、審査員は全員が交代するのではなく、何人かは次の年も審査に加わるようにして、この賞の質を一定に保つようしてもらいたいと思います。また、審査期間は十分にとっていただきたいと思います。今回は、後期開講直後の忙しい時期の審査でした。もっと時間的余裕が欲しいと思ったのは私だけでしょうか。これには、10月27日の文字・活字文化の日に結果を発表するという制約があったためと思われるのですが、結果発表日を固定するのであれば、そこから逆算して締切日を設定していただきたいと思います。応募作品数が増えた場合、一ヶ月足らずでの審査は不可能だろうと思います。私はこのような創作の経験はありませんが、応募する学生が十分な時間をとれるように募集期間を設定して、応募作品が増えることを望んでいます。授賞作品を発表した後で、読后感想文を募集するというのはどうでしょう？もっと広がりをもたせるコンテストであってほしいと思っています。

(おくの こうこ)

想像力と好奇心

第2回言語力大賞実行委員 教育学部 吉田 比呂子



2005年から始まった言語力大賞の選考委員の一人として、レポート以外の学生諸君の文章を読む機会を得た。言語力大賞の選考という機会を通して、学生諸君の想像力と好奇心に関して私の感じたことを、この場を借りて書かせていただくことに致しました。言語力大賞の選考の中で感じたこと、そして日頃接する学生諸君の感性とその表現力について私の感じたことを少し整理して書かせていただきました。従って思い付きや勝手な解釈もあるかとは思いますがご容赦ください。

さて、1回目、2回目の言語力大賞に応募されてきた作品を読ませていただいた私の感想は、作品の多くは「日常性」の中の「非日常性」やその逆の「非日常性」の中の「日常性」ということをテーマとしているものが多いように感じた。それは私の講義のレポートとして提出されてくる学生諸君のレポートの内容やテーマとも共通する点でもある。レポートは学生諸君の個々の興味や関心に基づいたテーマと内容を絞り込んで貰う形なので、それぞれの年ごとの学生諸君の興味や関心の傾向をレポートから自然と読み取ることになる。つまり、言い換えれば毎年、毎年の

学生諸君の想像力や興味の傾向をレポートから見ることになるのである。近年の学生諸君のレポートの問題の絞り込み方や関心の傾向は、私的な物事や言葉から出発するものが非常に多くなっている。例えば、「おにぎり」や「おむすび」等、日常使用している俗語の語源を調べたり、その違いに興味を持つ人が多くなっているのである。このように学生諸君の自己の興味や関心がより日常の言葉や生活に根ざしたものになっているのである。確かに以前にも日常に根ざした文化や事柄に関心を持っていた人は居ましたが、近年の傾向はより私的な小さな世界の中で破綻することのない状態を求めている。つまり小さい完成された世界にすることを求めている傾向が強くなるのです。このようにするためには、自然と自己の私的な世界に閉じこもることになり、自説の破綻を避けるために自己の想像力や好奇心を疑うことなく、ただ守り固執するというレポートが増えている。

勿論レポートと小説の想像力の質は違うが、自己の世界を創り上げるという点では共通する。そして読者や読み手に共感や共有性を求めるという点では、他者に発信するものであるから同一の性質を有するものだと言える。人は自己の世界を創り上げた時、その世界にプライドを持ちたいために、他者に共有、共感して貰いたいために知らず知らずに傲慢になってしまうことがある。独りよがりにならないために私は、論文や本を纏めたときいつも自己の世界を問い直すことにしている。小説を書くときもレポートや論文を書くときも、一度、立ち止まりこの私の創り上げた世界は独りよがりではないか、共感されるものか、阿ってははいないか、を問い直して貰いたいと思います。自己の世界が他者に共感されること、理解されることは自己の可能性を拡げることなのです。言語力大賞はその切っ掛けになれば、それで十分意味があるものだと私は思っております。

(よしだ ひろこ)



第2回表彰式の様子

第3回『言語力』大賞コンテスト

誰かに知ってもらいたくて、書いた物語

第3回優秀賞受賞 人文学部2年 三浦 南



去年に引き続き、応募をしようと思っていましたが、誰かに読んでもらいたい話がなかなかできあがらなかった夏休み。その時、ふと思いついたのが『共感覚』でした。今回賞をいただいた「もじおと」は文字を見ると音が聞こえる共感覚を持つ少年が主人公です。

作中では共感覚という言葉は一度も出てきませんから、共感覚の存在を知らない人が読めば、ファンタジー小説であるだけ。ただ、評価されたからこそ伝えたいことができました。

共感覚を描くことは、私の中で特別なことでした。書くからには絶対にいいものにしたいし、でたらめなことは書きたくないと、締め切りの日までずっと考えていました。推敲をしながらも、本当に書いていいのかと迷いました。どうすればおもしろく読んでもらえるか、どの場面を入れるか、共感覚をどの程度盛り込めばファンタジーで通るか。

私は「もじおと」についてずっと悩んでいましたが、本来小説を書くというのはこういうことなのかもしれないと感じました。書き手は、読み手のために少しだけ苦しい思いをする。それは、小説は読者がいて初めてできあがるものだから。誰かが読んで、感じて、考えて、そしていろいろな形が生まれていく。小説はそうであったら素敵だと思います。

「もじおと」も、よく分からないファンタジーだと思う人、授業で隣に座った人がこんな感覚を持っているかもと考える人、自分も共感覚者だと気付く人、そこそこおもしろい話だと思ってくれる人、いろんな人がいて欲しいです。

物語を仕立てていくうちに、私は私の好きなもの、素敵だと思うこと、嬉しいことを誰かも素敵と思ってくれたらいいなと考えるようになりました。素敵を伝えるために、おもしろく書いてやろうと。

物語を書くためには、何か自分なりの思いがあった方がいいと思うのです。なぜ書くのかは、なぜ生きるのかに似ています。答えがたくさんあっていいもので、自分の理由を見つけなければ、決められなければ、続けられないこと。逆にいえば、何か書きたいことがあれば、伝えた

いことがあれば誰でも書けるものではないでしょうか。

言語力大賞コンテストの規定字数は少ない方なので、興味のある方は挑戦して欲しいです。いろいろな作品があれば、素敵な話が生まれるかもしれません。私は書き手である前に読み手であるので、もっともっと物語と出会いたいです。審査員として参加したいくらい。

字数については、毎年授賞式で少ないという意見が出ます。個人的には、短編である方が初めて小説を書いてみようと思う人も応募しやすいだろうし、審査員も目を通しやすいのではないかと思います。年々応募数が増えているならなおさらです。何より、短編小説というのは限りなく必要な言葉だけでできているもの。どんなテーマで、いかに書き上げるか、決まった字数内でまとめられるかは、書き手の腕の見せ所です。

書きたいと思った時が、勝負ですよ。

(みうら みなみ)

言語力大賞と詩歌

第3回言語力大賞実行委員 人文学部 内海 淳



言語力大賞の選考委員を第2回・第3回と続けて担当した立場から、これまでの応募作品について少し述べてみたい。ただし、何らかの賞を受賞した作品についてはすでに選考委員からのコメント等があるので、ここでは、受賞しなかった作品、特に詩歌の応募作品について述べようと思う。

大賞の選考は、7名の選考委員が全作品を読み、それぞれの委員が順位をつけた結果を持ちより、各委員の順位の数値を加算した結果最も少ない数値の作品を最も優れたものとするという方式で行われた。しかし、20や30もある応募作品に明確な順位をつける事は事実上不可能である。私の場合は、まず、「良い」、「普通」、「悪い」の3グループに分けたが、細かい順位は上位の「良い」グループの5から6作品程度しかつけられず、残りの「普通」グループは実質的な順位は付けていない。しかし、「悪い」グループは明確に最下位となる。

この「悪い」グループは、第2回時には2作品、第3回時には1作品だったが、どちらにも同一の応募者の俳句の作品が入っていた。しかし、これは俳句だから駄目だという訳でも、

この人物の作品が殊更に劣っていた訳でもない。評価できなかつたのである。この応募者は、第2回の時には1句、第3回の時には10句程度の俳句で応募している。しかし、この程度の分量では詩歌を評価する事はできない。

国語の教科書等では、俳句や短歌のような詩歌を、一人の作者について1句や1首のみ挙げて紹介することが多い。例えば、芭蕉であれば「夏草や強者どもが夢の後」であるとか、藤原定家であれば「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」などが挙げられるであろう。このようなことから、この応募者は俳句や短歌などは1句や1首でもその価値が認められるという考えを抱いて、第2回の時に1句のみで応募したのであろう。

しかし、これらの名句や名歌はすでに評価が定着しているから1句や1首で挙げられているのであり、最初から単独でその価値が評価された訳ではない。芭蕉の「夏草や強者どもが夢の後」は、『奥の細道』という文脈の中で評価され、その名句としての地位が高まっていったのである。芭蕉や定家のような卓越した才能をもつ者であれば、たった1句や1首でもその才能を評価できるのかもしれないが、私のような単なる読み手に過ぎない者にとっては不可能である。

この応募者は第3回の時には10句以上で応募したが、私は再び「悪い」グループに入れた。各句の間に有機的な関連が見られず、単なる寄せ集めであると判断したからである。複数の俳句や短歌を無作為に並べるのではなく、その内容やイメージを考えながら物語性や明確なメッセージを植え付けるように配置することが必要となる。例えば、寺山修司の「ふるさとの訛りなくせし友といてモカ珈琲はかくまでにがし」という有名な歌は、「草の穂を噛みつつ帰る田舎出の少年の知恵は容れられざりし」など他の歌と相互に作用して、田舎の文学少年の劣等感を強烈に打ち出す明確な物語を紡ぎだしている。

言語力大賞は決して詩歌を認めていないのではない。ただ、詩歌で応募する者は、俳句や短歌で何らかの「物語」を作り上げてほしい。そのような詩歌の作品であれば、ちゃんとした評価の対象となるであろう。

(うつみ じゅん)



第3回表彰式の様子

弘前大学生の「言語力」について

第3回言語力大賞実行委員 教育学部 郡 千寿子



弘前大学附属図書館主催の言語力コンテストも今回で3年目となる。初回から審査委員のひとりとして参加しているが、学生の文章表現能力について感じたことを少し述べてみたいと思う。

近年、生徒や学生の言語力の低下が様々なところで取り上げられることが多い。

2003年、経済協力開発機構（通称OECD）が世界32カ国で15歳児（約26万5千人）を対象に学習到達度調査（通称PISA調査）を実施した。読解力、数学、科学の主要3分野についての学力調査であるが、2000年からの経過比較ができるため、2003年の調査結果が大変注目された。ご承知のように日本は、「読解力」が8位から14位に低下し、いわゆるPISAショックが教育界を揺るがすことになった。教育内容についても、文学偏重から言語力重視へと見直されることになり、教育の現場は大きな改革途上にあるといえる。

そうしたことを背景に考えると、大学での「言語力コンテスト」の存在もまさしく教育実施政策としても位置づけることができる。学生たちに「言語力」について再考してもらい、またそうした技術を磨く機会としてもらおうという狙いもある。応募者数が増加している点、また応募者の力量が上がっている実態からみて、その効果のほどは少しずつではあるが現れてきていると思われる。

さて、肝心の学生の言語力の現状についてである。評論部門に応募が少ないことは、論理的な文章構成能力に自信がない学生が多いことを示しているともいえよう。批評や論理的な思考を回避しがちな学生のひとつの実情でもあるが、今後はこの方面にも、果敢に挑戦してほしいものである。

一方の創作については意欲作が多く、応募数も増加している。しかも人文系の学生だけでなく、農学生命、理工、医学部といった理系学生たちの参加が多いことには正直、びっくりさせられた。つまり、小説といった創作活動については、文理問わず、能力や意欲を秘めた学生が多いということである。書くことが苦手、と評価されがちな今時の学生たちであるが、実は機会さえ与えてやれば、そして教育方法によっては、文学的な資質や能力が一段と伸びる可能性があることを示していると思われる。世間ではクールと思われがちな彼らだが、自己内面に表現したい、という熱い欲求をもっている学生たちが多いことは喜びである。どの作品からも、若い彼らならではの発想と文学的薫りが見て取れた。

ただし、世界レベルで必要とされている言語力というのは、前述したPISA型読解力であり、批判力をも含む論理的な文章表現力である。ある意味で他者とは隔絶した、独特の世界観をもつ想像性豊かな創作の分野においては、本学にも能力高い学生が多いようだが、その一方で、創造の世界だけに限らない、論理的な言語表現力の方にもぜひ目を向けて研鑽を積んでもらいたいと思う。

創作も評論も、どちらの言語力においても磨きをかけ、今後ますます活躍してくれる学生が増えることを期待するばかりである。

(こおり ちずこ)

書くことと「書く力」

第3回言語力大賞実行委員 農学生命科学部 佐原 雄二



学生にとって、論理的で改まった文章を書く場合といえば、試験の答案やレポート、それに卒業論文や修士論文などであろう。とりわけ卒業論文は、たいていの学生が取り組むものであるうえ、自分だけの課題を長文で書き表すという意味で、学生生活の締めくくりとして重要な機会である。何年も卒業論文の添削を行ってきた経験から、私は次のように考えている。

自分の考えを平明に、誤読されないように書くこと、それが最重要のことである。ところが実際には、(個人差の大きいことを断っておくが)内容が理解できなかつたり誤読されやすかつたりするタイプの文章にしばしば遭遇する。症状としては論旨の飛躍、不必要に長いセンテンスや段落、適切でない言葉の使用や言葉の不足など。書いた本人はどうやら内容が分かっているらしいが、読む人には伝わらない。これでは本人が損をしてしまう。

こういった文章がなぜ生じるのか。そもそも、そのような文章を書く機会がないことがあげられよう。さらに思い当たるのは携帯メールの罪過である。あれも確かに「書く」行為には違いない。しかしメールで使うのは通常話し言葉である。話すことは書くことと違ってさほど論理的でもないし、そもそも難しい論題を扱うことも、その論題で相手を説得することもないだろう。携帯メールは、「携帯を介在して話をしている」のであって、文を書いているのではない。しじゅうメールをうっていることは、「改まった文章を書く」場合にも同じ調子で臨むことにつながるのではないか。

「書く力」を涵養するにはどうするか。第一には良書を読むことである。何も自然科学の「硬

い」文章を読めというのではない。もちろん文学の分野にもいい文章はたくさんある。志賀直哉の簡潔で平明な文体などは大いに参考になる。第二には、批評を恐れずに書くことであろう。原稿用紙のひとマスずつに書き込んだ時代とは違い、今は文の推敲が簡単に行える。自分で書いた文章を、何度も推敲を重ねて磨き上げていくことの楽しさをぜひ体験してもらいたい。

「言語力大賞コンテスト」はそのような機会の一つである。これで3回を重ねた「コンテスト」について若干の感想を述べたい。まず、「評論」部門の応募が3回目に至ってやっと現われた。このように少ないのはどういうわけか。かっちりした論理的な文章を書くことが苦手なのだろうか。あるいは論理を展開すること自体が苦手なのだろうか。腕試しのつもりでぜひ挑戦してほしい。

他方、創作部門は定着しつつあるようだ。中には2年続けて応募する人もあり、好ましいことと思う。一般に実体験が乏しい一方、学生が書いた小説には清新さがあって、読んでいて楽しい作品が結構ある。もっと宣伝の余地がある以外は、「コンテスト」の現行方式に大きな問題はないと感じるので、このまま回数を重ね応募作品が増えてくれば、さらに質の高い作品が現われるのではないかと期待する。

最後に一言。文学作品なのだからといって、感性だけで文章を書き連ねていったいいものではない。破格の文体や異様な状況設定などの奇策に頼るのでなく、まずは正攻法に習熟するのが正道であろう。書き表したいことを的確な言葉を用いて読者に分かりやすい文章にすること、これは文系・理系を問わず肝心なことである。 (さわら ゆうじ)

第3回弘前大学学生『言語力』大賞コンテストは下記のスケジュールで行われました。

対 象：学部学生

部 門：Ⅰ文学作品部門（ジャンルは自由） Ⅱ評論部門（テーマの設定は自由）

字 数：両部門ともに、原則として4,000字程度

広 報：平成19年6月中旬～

図書館HP、各部局等へのポスター掲示、学生への全員メール等による広報

締 切：平成19年 9月25日（火）

結果発表：平成19年10月26日（金）（「文字・活字文化の日」が土曜日のため）

表 彰 式：平成19年11月14日（水）

審 査 員：『言語力』大賞コンテスト実行委員会委員

賞 大賞 各部門 1名（図書カード10万円）

優秀賞 各部門若干名（図書カード 5万円）

佳作 各部門若干名（図書カード 5千円）

受賞作品の公開：図書館HPに審査評を加え掲載

*****平成20年には第4回が行われる予定です。奮ってご応募ください！*****

図書館への声

学生アルバイトから見た図書館

利用される皆さんの姿を見て、

私自身が勇気づけられた 人文学部 4年 岸部 勇樹



私は、3年前から文京地区の附属図書館でアルバイトをしています。私の仕事内容を簡単に説明しますと、平日の週2回、16時30分から閉館の22時まで、本の貸出や返却などのカウンター業務や、書庫内資料の出納、閉館前の後片付けなどです。これを読んでいる皆さんの中で、「こんなに夜遅くまで開館していても、利用する人っているの?」とお思いになる方もいらっしゃるかもしれません。現状は、かなりの数の学生が閉館ギリギリまで利用されています。レポートや提出物などの準備や、公務員試験や教員採用試験のために勉強している学生がほとんどです。

自分と同じ大学生に接する仕事といえば、おそらく、この仕事以上の仕事はないと思っています。今回は、私が普段仕事の中に図書館内で接する学生の中で、ほぼ毎日図書館を利用している学生を紹介します。私と同じ人文学部に所属する4年生のY君は、教員採用試験や卒論のために、朝早くから閉館ギリギリまで図書館を利用しています。Y君は図書館で勤務中の私を見ると、手を上げて挨拶をしてくれて、「岸ちゃん（Y君は私のことをこう呼ぶ）、夜遅くまでお疲れ〜」や「頑張って!岸ちゃん!」と声をかけてくれます。勤務中の私にとって、非常に嬉しい瞬間です。Y君は私の学ぶ経済学とは畑違いの国際関係のゼミナールに所属しています。Y君はいつも図書館にパソコンを持参し、難しい国際問題の本を読み、大事なところをパソコンに打ち出しています。また、Y君は図書館のカウンター近くにある新聞をいつも1時間近くかけて読んでいます。とはいえ、Y君は朝早くから閉館ギリギリまで図書館で勉強しているせいか、19時ごろに点検で図書館の中を見回りと机の上で寝ていることもしばしば。そして、あまりに図書館で熱心に勉強していたためか、勉強道具が入ったバッグを図書館に忘れて家に帰ったこともあります。そんなY君の、「教員」という自分の目標に向かって一生懸命努力し邁進する姿には脱帽します。Y君の他にも、夜遅くまで公務員試験や教員採用試験などに合格するため図書館を利用する学生が数多くいます。私はそういう方たちに、気持ちのよい図書館になるように心がけて、3年間仕事をしてきました。

私の図書館でのアルバイトはまもなくピリオドを打ちます。私は春から、自分が目標として

いた新聞記者として働き始めます。3年間の図書館でのアルバイト生活を振り返ると、夜遅くまで自分の目標に向かって努力している利用者の姿を見て、私自身が勇気付けられていたのかもしれない。

(きしべ ゆうき)

図書館でのアルバイトを通して

人文学部4年 山本 卓司



私は2～4年生の3年間、大学附属図書館でアルバイトをしてきました。具体的には2年生から3年生までは医学部保健学科分室、3年生から現在までは医学部分館でカウンター業務、また4年生の7月から約3ヶ月間本館で図書整理の仕事をさせていただきました。そして普段は本館の利用者であるということも含め、3ヶ所の図書館・図書室に関わることが出来ました。その中でカウンター業務を通して、私なりに感じたことを述べたいと思います。

私は3年間の医学部にある図書館でのアルバイトを通じて、自分自身が利用する方法以外にも図書館が果たしている機能があることを知りました。

図書館では静かな環境で勉強ができることや、勉強に必要な文献の入手・パソコンからの情報収集・新聞の閲覧といったさまざまな情報を得ることができます。私自身、本館を上記のことをするために利用してきました。同じ学部の知り合いという狭い範囲ですが、彼らも私と同様の利用の仕方だと話していました。そのため、上記以外に図書館ではどんなサービスがあるのかを、あまり理解していませんでした。

一方、自分が医学部分館でカウンター業務に就いて、利用者の方の対応をしていると自分や周りの人とは利用の仕方等が異なる（もちろん主に医学に関する図書を扱っているのも、それが異なってくるのは当然なのですが）ことを感じました。特にそれまで自分が知らなかった、文献複写というサービスを利用される学生や先生が結構多いということで違いを感じるようになりました。これは入手したい文献が所蔵していない場合、他大学等から必要なページを複写して取り寄せるものですが、医学部分館でアルバイトをしていると私が勤務の時はほとんど毎回、このサービスを利用される方がいらっしゃいます。もちろん本館にも同様のサービスがあることを後で知り、その意味では利用の仕方に違いはないと言えるのですが、利用者の方のうち文献複写をされる方の割合はHPの附属図書館概要を見ると、本館と比べて多いことがわかり

ます。医学部の学生や先生に加え、病院に勤務されている方等も利用されている点で、このこと一つをとっても、医療関係の方が情報を得る上で図書館は重要な機能を果たしていると感じました。

私が図書館を利用するのは前述の通り、主に必要な文献を探す・パソコンで論文を作成する・資格の勉強をするといった時で、それまで知らなかった図書館の果たす機能をアルバイトの仕事を通じて一部ではありますが、知ることが出来ました。今回はいくつかある中で、文献の複写が私の中で印象的だったので述べさせていただきました。

今後附属図書館がどのように変わっていくか分かりませんが、これからも利用者の方に必要な機能を果たしていくことを願っています。

(やまもと たくじ)

学びの場としての図書館

人文学部 4年 岩崎 純愛



私は、保健学科分室の学生アルバイトをして3年になります。アルバイトの勤務時間は、17時から20時までの延長開室時間です。

アルバイトではおもに受付カウンターの業務を行なっています。わずかではありますが、アルバイトを通して見た保健学科分室の様子を紹介したいと思います。図書室の利用者はほとんどが本学の学生ですが、他大学の学生や一般の方、病院勤務の方もみられます。身分を問わず、多くの方が学ぶために図書室を利用しています。図書室内には閲覧席があり、そこで勉強や読書をすることができます。室内にはさまざまな利用者がみられます。閲覧席の机で勉強をしている人、書架で探し物をしている人、勉強に疲れたのか机に顔を伏せて眠っている人等です。試験期間中は、早足の学生が頻繁に図書室に出入りし、室内の閲覧席はほぼ満席状態になります。また、閉室時間ぎりぎりまで机の上に何冊ものノートを広げて勉強している人が多くみられます。熱心な室内の雰囲気触発されて、私も勉強しようという気持ちになります。

私事ですが、私は本館の図書館をよく利用します。特に利用するのは旧書庫で、授業で必要な本や発表に使用する本を探したり、面白そうな本を手にとって立ち読みしたりします。本1冊には多くの情報が記されています。それが図書館に所蔵されている図書全体となると、その情報量は膨大です。その中から、自分が欲しい情報が書かれている本を「発掘」したときは、

喜びで胸がいっぱいになります。また、それまで気にも留めていなかった事が、何気なく手にとって読んだ本から急に興味を抱くようになり、その分野の本を何冊も読み漁ったということもありました。図書館を利用する人は、誰でもこのような体験をしたことがあるのではないかと思います。

図書館は、学びたいという意思を持つ人が自らすすんで足を運ぶ場所です。静かな環境で勉強したいという方はもちろんですが、何かを知りたい、学びたいと思った方はどうぞ図書館にいらしてください。そしてぜひ自分の手で図書を「発掘」してみてください。

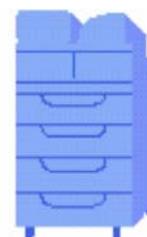
(いわさき よしえ)

☆医学部分館 カラーコピー機導入のお知らせ☆

医学部分館でカラーコピー機を導入しました。平成20年4月1日より下記の料金でカラーコピーを受け付けますので、どうぞご利用ください。(図書館資料の複写のみ)

区分	カラーコピー料金
学内者(校費・私費ともに)	40円
学外者、図書館間ILL	70円
セルフコピー(校費のみ)	35円

※ 私費用セルフコピー機(生協設置)は今まで通りモノクロコピーしかできません。ご了承ください。



インターネットシナプス

附属図書館長 正村 和彦

かつては様々な情報を得る場所として図書館は重要な働きをしてきました。身近にある唯一の情報源であったと思います。近年、インターネットが日常の情報道具となって、かなりの情報が卓上で得られるようになりました。フリージャーナルという無料で使用できる学術情報も増えています。学生のみなさんは英語力を身につけると情報の世界が圧倒的に増えます。話すことができなくてもいいから、できればもう一つ外国語を読めるようにすると大いに役に立ちます。第2外国語を選択必修科目からはずして単なる選択科目にしている大学は残念です。これはたぶん英語さえできない学生に第2外国語は‘いじめ’でしかないと言う考えなのでしょう。

理系、文系ともに教科書など買わなくても、世界のウェブサイトからかなり専門的資料を得ることができます。広い情報に接すると自分だけで考えていた事柄（独断）が修正されます。ただし、ウェブサイトに乗っている情報は玉石混交ですから、複数の情報を照らし合わせて判断する必要があります。

私は何かを書くとき、または教育の方法や研究のある問題の解決のヒントを得たいと思うときウェブサイトを探します。Googleなどは学術雑誌、ホームページなどが一緒にでてきますので、こんなことを考えている人もいるのかということにも出会うことがあります。創造や問題解決の糸口は無からは生まれません。多くの場合、異なった領域の一見無関係の情報が脳の中でシナプスする（接続）ときに生まれます。このシナプス能力が創造力、問題解決能力であると思います。現代社会では、充分時間があるときに本を読んで、短時間で何か役に立つ情報を得たいときはインターネットシナプスということでしょう。

(しょうむら かずひこ)

本との出会いを楽しむ <第1回>

理工学部 柴 正敏



本との思いがけない出会いが学を志すきっかけとなる。今から35年も前のことである。

大学に入学したが、何を見ても聞いても面白くない日々が続いていた。大学生協の書籍整理市があった。岩波の本は、ハードカバーで内容もしっかりしているので、一冊買おうかと思った。厚くて安いものを探した。458ページで1800円。本の名前は、都城秋穂著「変成岩と変成帯」（1965年刊）。岩石に関する本らしい。第1章の緒言を読むと、いきなり岩石の三分類（火成岩、堆積岩及び変成岩）が書いてある。これら岩石のでき方がわかりやすく書いてある。この本は変成岩の本なので、その分類が書いてある。変成岩は地球のどんな所に出現するかがまとめてある。第2章は変成作用の研究史である。この章は地質学・岩石学の歴史を知るにも絶好の章である。ここで注目に値するのは、その時々新しい変成岩研究の発信源は、中央から離れた比較的小さな国の大学である。例えば、フィンランドのヘルシンキ大学、ノルウェーのクリスチャニア大学、ニュージーランドのオタゴ大学などである。第3章には変成作用のメカニズムが書かれている。再結晶作用、臨界温度、ダルシーの法則、固体拡散、フィックの拡散の法則、流体包有物、水の変形作用時の役割など、わかりやすく書いてある。第4章は熱力学の基礎と応用である。熱力学の本を読んでもなくてもわかる。ギブスの相律やクラペイロン-クラウジウスの方程式の導き方やシュライネマーカースの束の方法とその応用も出ている。熱力学的データを用い、固体-固体反応、脱水反応、脱炭酸反応の反応曲線の求め方も懇切に説明されている。第5章には鉱物の結晶化学が書かれていて、イオン半径や配位数なども解説されている。第6章は変成岩に出てくる鉱物について記載していて、固溶体、エクソリュージョン、ポリタイプ、秩序-無秩序転移などについても勉強できる。第7章及び第8章は鉱物相及び変成相の説明である。変成岩が化学平衡に達していて、変成岩の原岩が類似する化学組成で、同じような温度・圧力・水のフュガシティー条件であれば、同じ鉱物構成（同じ鉱物組み合わせ）になると考えられる。同じ鉱物構成をもつ岩石は同じ変成相に属するとする。現在10の変成相が知られている。第9章は変成相系列の説明である。変成岩地域を調べると、認められる変成相の組み合わせに規則性があり、大きく3つのタイプに分けられる。すなわち低圧型（紅柱石-珪線石タイプ）、中圧型（藍晶石-珪線石タイプ）及び高圧型（ヒスイ輝

石－藍閃石タイプ)の変成相組み合わせである。第10章は北アメリカ大陸、第11章はヨーロッパ大陸及び第12章は日本を含めた西太平洋の弧状列島の形成と変成作用との関係が論じられている。最後の第13章は「広域変成作用の原因と地殻の進化」とし、地殻の形成という重要な課題について、変成岩を調べるとすっきりした見通しが与えられること示している。私はこの本を読んで初めて、学問には美しい体系が存在することを知った。そのような学問に携わってみたいと思い、岩石の勉強を始め、その後大学院に進学した。

都城先生は現在ニューヨーク州立大学名誉教授で、来日の折、仙台と京都で二度お会いしました。とても物静かな方で、言葉を選びながら平易に話してくださいました。まさに、本の書き方と同じだと思いました。

(しば まさとし)

柴先生がご紹介された、都城秋穂著「変成岩と変成帯」
(1965年刊)は本館でも所蔵しています。
興味のある方は是非お読みください。

所 在：本館旧書庫5層

請求記号：458.8||Mi83

図書ID：90375246



弘前大学出版会より

本の紹介

お問い合わせ先
弘前大学出版会
Tel:0172-39-3168
FAX:0172-39-3171

弘前大学出版会のこれまで

弘前大学出版会は国立大学法人化直後の2004年6月に教育研究活動を支援する役割を担う目的で全国初となる国立大学法人の学内組織として発足しました。その後活発な出版活動が評価されて設立3周年を迎えた本年、有限責任中間法人大学出版部協会に加盟することができました。学術書のほか地域に根ざした書籍も精力的に出版し、これまで37点刊行のうち、設立記念出版の「津軽の華」（弘前大学所蔵ねぷた絵全作品）を始め7点が地元大型書店のベストセラーランキングに入りました。

今回は、近刊書籍のうち地域に関連したものを紹介させていただきます。

弘大ブックレットNo. 2

『青森県のフィールドから—野外動物生態学への招待—』
佐原雄二編（A5判、定価525円）

動物の本質は「食べる」ことである。本書では、食べることを中心に、動物の毎日の生活がどのように成り立っているのかを、青森県内にすむ様々な魚類や鳥類の生活を実際に研究した結果をもとに解き明かしていく。全部で8種の魚と2種の鳥が登場するが、それら魚たちのすみ場は河川、溜池、水田・水路、河口、海岸と多様な場所にわたっている。昼と夜とでは異なった種類のエサを利用する魚の話や、エサの存在に応じて活動性リズムが形作られる魚の話、さらには潮汐のあるすみ場で潮汐に対応するリズムを持つ魚の話などから、魚の捕食者であるアオサギやゴイサギなどのサギ類に話題は移り、それら捕食者がどのようにエサ動物の活動周期を形作っているのか、あるいは逆にエサ動物の活動性によって捕食者の活動周期が影響されているのかに話は展開していく。私たちの身近にすむ動物たちを主人公に、その生活に隠れた秘密が解き明かされる。



弘大ブックレットNo. 3

『Dr. 中路の健康医学講座—寿命を読み解けば健康が見えてくる—』 中路重之著（A5判、378円）

Dr. 中路の健康医学講座
寿命を読み解けば健康が見えてくる

中路重之



弘前大学出版会

本書は著者がふるさと青森県の健康レベル向上を願う気持ちから青森県民の平均寿命の話にかなりの紙面を割いている。しかし、「青森県民の平均寿命」という題材を通して普遍的なメッセージが込められているので、ぜひとも全国の方々にも本書を手にとっていただきたい。著者は、健康であるためには二つのことが必要であると考えている。ひとつは「正しい健康知識」、もうひとつは「健康に対する考え方」である。雑多な健康情報が氾濫する現代において、正しい健康知識を取捨選択するのは容易ではない。これらの知識をどのように組み合わせ、積み上げて、あるべき「考え方」にまでまとめあげていくの

かは、さらに面倒である。すなわち、たとえば「病気予防の情報では何が正しく、また何をなすべきか」には、それ相応の知識と考え方が求められる、ということである。本書では現代人が突きつけられているこの大問題を取り上げ、できる限りの分かりやすい解説が試みられている。

『リンゴ農家の経営危機とリンゴ火傷病の検疫問題 —WTO体制下の構造問題に迫る—』 宇野忠義著（B5判、483円）

おいしいリンゴは、永年の英知と経験、自然・病虫害との闘い・共生のたまものであり、その価値が正当に評価され、再生産できることを待っている。ところが、そのりんご産業が現在重大な危機に直面している。1990年4月にりんご果汁の輸入自由化が決定され、それ以降果汁の輸入が増大を続けており、こうした国際競争と輸入圧力によって極めて厳しい局面に立たされてきた。ことに、リンゴ農家の経営の悪化はかつてない厳しさがあり、耐え難い恐慌的状态に陥っている。

青森県の稲作も同様に厳しい状況にあるが、このような事実は一部の専門家のみしか知らない。広く一般には知らされていないといえる。危機は貿易自由化との関連で発生しており、その根源には1995年に成立したWTO（世界貿易機関）体制の存在とそれがもたらす構造的な問題性を指摘できる。本書では、国際的視野の下で、経営問題と検疫問題を通して、WTO体制の構造的な問題に迫っている。本書はリンゴ産業・農業関係者のみならず、消費者にも是非目を通し、考えていただきたい書物である。（弘前大学出版会 編集委員長 真下正夫）

リンゴ農家の経営危機とリンゴ火傷病の検疫問題
—WTO体制下の構造問題に迫る—



宇野忠義



弘前大学出版会

弘前大学学術情報リポジトリについて

～世界に向けて発信～

弘前大学附属図書館では、本学の様々な教育・研究成果を世界に向けて発信するシステム、「弘前大学学術情報リポジトリ」の試験公開を平成19年3月14日より開始しました。
(URL: <http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>)

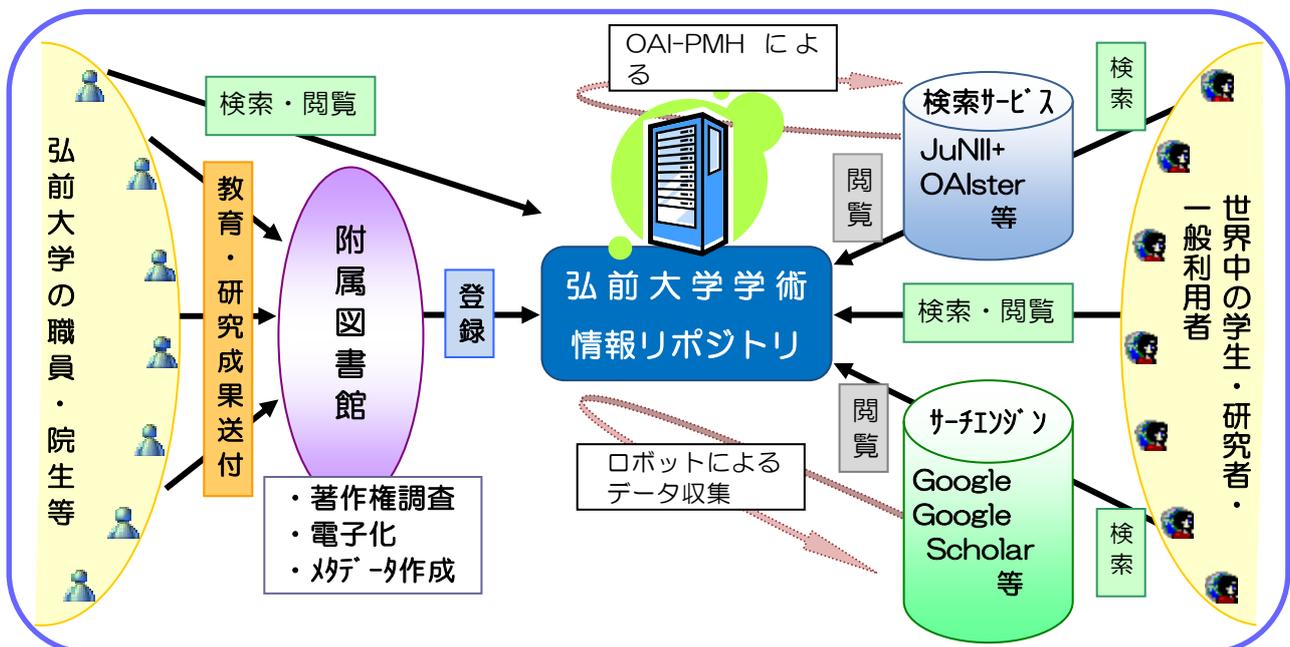
1. 弘前大学学術情報リポジトリとは

弘前大学学術情報リポジトリとは、弘前大学の教育・研究活動において作成された電子的形態の教育・研究成果を収集し、恒久的に蓄積・保存し、無償で公開、発信するためのインターネット上の保存書庫です。2008年1月末現在、国内では73機関、世界では990以上の機関リポジトリが公開されています。

2. 学術情報リポジトリの内容

弘前大学学術情報リポジトリの保存対象となるコンテンツは、学術雑誌掲載論文、紀要論文、学位論文、科学研究費報告書、プレプリント、学会発表資料、図書、教材等、大学が生産するすべての教育・研究成果となります。

3. 学術情報リポジトリの仕組み



4. 学術情報リポジトリのメリット

本学の教育・研究成果を発信することによって、次のようなメリットがあります。

✚ 研究者にとって

- ・ 教育・研究成果の可視性の向上と引用率増加の期待
- ・ 教育・研究成果の新たな発信ルートの獲得とデジタルファイルの永続的保存

✚ 大学にとって

- ・ 大学活動のショーケース
- ・ 教育研究成果の社会へ還元と説明責任の遂行
- ・ 弘前大学の知名度向上

5. 学術情報リポジトリの今後について

現在、試験公開中で登録件数が143件と少ない状態ですが、今後は、学術雑誌掲載論文を中心に積極的に収集し、学術情報リポジトリを充実していく予定です。

お問い合わせ、論文送付先

学術情報部学術情報課資料管理グループ

Tel : 内線 3 1 5 6

E-mail: repohelp@cc.hirosaki-u.ac.jp

(図書情報担当 三上豊)

Scopus(スコープス)中止に伴う

代替データベースの紹介

平成17年度から導入したエルゼビア社の科学文献データベース Scopus ですが、外国雑誌等全般の継続的な値上がりにも係わらず、厳しい財政状況から関連予算の増加が見込めず、図書館運営委員会での検討の結果、平成19年度から購入中止となりました。

利用者の皆さんには大変ご迷惑をおかけしますが、Scopus に代わるものとして、Web 上で提供されている無料データベースや学術用検索エンジンをいくつか紹介しますので、Scopus 終了後の検索手段としてお役に立てていただければ幸いです。Web 上で公開されている無料データベースや検索エンジンは有料データベースに比べて収録源に偏りがあり、検索機能も限られ、また検索結果の精度や網羅性にも課題があるものが多いと言われています。しかし逆に有料データベースでは得られない文献がヒットする可能性もあります。また検索した結果、ScienceDirect など本学が購読中で利用可能な電子ジャーナルがヒットすれば、フルテキストがリンクから開ける場合があります。ただし検索結果のリンク先が異なると利用できないこともあるため、図書館HPの「弘前大学で利用できる電子ジャーナル」でも念のため確認してください。

Scirus(サイラス)

<http://www.scirus.com/srsapp/>

エルゼビア社で提供している科学分野に特化した検索エンジンです。科学関連の Web ページを検索の対象とします。ScienceDirect、IoP、Medline などから収録した抄録や千葉大学などの機関レポジトリ、USPTO(米国特許標庁)、EPO(欧州特許庁)の特許関連のデータも検索することができます。

CrossRef Search

http://www.iop.org/EJ/search_crossref その他

引用文献相互リンク CrossRef に加盟している45の出版社の電子ジャーナルを全文検索できます。次のURL(<http://www.crossref.org/crossrefsearch.html>)から参加出版社の一覧を見ることが出来ますが、いずれの出版社のサイトからも検索が可能です。最大手出版社のエルゼビア社は参加していません。

IngentaConnect

<http://www.ingentaconnect.com/>

イギリス Ingenta 社より提供されています。文献複写サービスが中心事業のため、2007 年 3 月現在、約 3 万の出版物の 2100 万件の記事等を収録しており、検索が無料で出来ます。Browse Publication (<http://www.ingentaconnect.com/content>) から収録誌を確認できます。本学が電子ジャーナルを Ingenta 経由で提供している場合はフルテキストが利用できます。

Google Scholar

<http://scholar.google.com/>

Google が提供する学術文献に特化した検索エンジンがベータ版として公開されています。日本語版も提供されています。学術情報をウェブ・クロールで収集する以外に提携している出版社や図書館、PubMed などから提供されたデータをデータベースに収録していますので、収録源や検索結果には偏りが出てきます。自然科学系分野とオープンアクセス論文への検索に比較的強いと言われています。無料データベースの中で唯一被引用回数が表示されることと被引用文献へのリンク機能があることが最大の特徴です。

PubMed

<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/entrez>

米国立医学図書館 (NLM) が作製している有料データベースの MEDLINE を中心に出版社提供の抄録・書誌事項、OLD MEDLINE (1950-1965)、MEDLINE 収録前や収録対象外のレコードを加えた無料公開版のデータベースです。医学・生命科学分野を中心に約 1,600 万件を収録しています。MEDLINE の検索機能が一部制限されているため、MEDLINE に比べると検索結果の精度に差が生じますが、検索結果からそのまま本学で利用可能な電子ジャーナルのフルテキストへリンクすることができます。また RSS 形式で最新情報を受け取ることもできます。

以上 4 点のデータベース、検索エンジンを紹介しました。その他、教育学分野では **ERIC** (<http://www.eric.ed.gov/>) や農学分野では **Agricola** (<http://agricola.nal.usda.gov/>) などがデータベースとして無料公開されています。また国内の論文を検索したい場合には、国立情報学研究所が提供する **CiNii (サイニイ)** (<http://ci.nii.ac.jp/>) や国立国会図書館作製の **雑誌記事索引** (<http://opac.ndl.go.jp/Process>) などが全分野にわたって収録されていますので、網羅的で利用しやすいデータベースです。

(雑誌情報担当 中田晶子)

学術講演会報告

弘前大学附属図書館主催学術講演会

第3回 平成18年11月9日(木) 16時～

第4回 平成19年11月8日(木) 16時～

弘前大学附属図書館では、平成18年11月9日(木)、弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールにおいて学術講演会を開催しました。講演会は、地域社会への貢献を期して、平成16年度の法人化以降毎年度開催されています。

第3回となる平成18年度は、地元青森市ご出身で気候学がご専門の^{まえじまいくお}前島郁雄氏(東京都立大学名誉教授)を講師にお迎えして、「江戸時代は小氷期だったー弘前藩庁日記の天気記録は語るー」と題した講演が行なわれました。

講演では、1660年代から約200年間、弘前と江戸で書き継がれた弘前藩庁日記の毎日の天気記録について解説され、科学的観測がなされていなかった時代の史料を読み解き、近代気候学の方法と知識を用いて当時の気候を再現し、同時代の世界の気候と比較するなど、前島氏の研究の一端が紹介されました。



前島氏は講演のなかで、「日本における近世の気候変動の実相を明らかにし世界に発信できた



のは、弘前藩庁日記の存在ゆえであり、弘前大学がモットーとする『世界に発信し、地域と共に創造する』ことに重なる」と語り、長年書き継がれた貴重な資料を後世に伝え残すことの重要性を強調され、「まさに『継続は力なり』、この津軽人の心意気を弘前の街づくりや大学の活性化にも活かしてほしい」と弘前大学へのエールを送って下さいました。

また、弘前大学の前身である旧制弘前高等学校の同窓会長を務める前島氏は、講演に先立ち、総合文化祭の企画展として附属図書館で開催されていた「旧制弘前高等学校資料」展示会場を訪れ、教卓や学生新聞等に見入り、往時を追懐され

ていました。

第4回学術講演会は、平成19年11月8日、広島大学大学院文学研究科の^{かわにしひでみち}河西英通教授を講師にお迎えし、『『東北』への道』を演題として行なわれました。

河西教授は弘前大学人文学部ご出身で専門は日本近現代史、青森県史専門委員などを務められるなど、本学をご卒業後も本県および本学との繋がりが深くお有りです。

講演ではご自身の著書「東北一つくられた異境」、「続・東北―異境と原境のあいだ」などを参考に、日本史における東北の位置付けの変遷を紹介し、東北が未開地や異境といったイメージとなったのは、歴史を国家や国民といった単位で捉えることに限界があったからではないか、と語られました。また、東北を地名としてではなく、地域思想・意識として位置付ける立場に立ち、世界に向き合う立脚点としての「東北」を提唱されました。

講演の最後には、弘前大学国史研究会の研究業績を紹介しながら、その土地・土地の大学にある日本史を学ぶ同窓の力をもって、その地域に根差した新しい視点をもった日本史を作り上げていくことが必要であると力説され、地域から発信する「自立した歴史」学を共に目指しましょう、との言葉を本学へのメッセージとしてお送りくださいました。

附属図書館では、毎回講演会開催時にアンケートを行なっていますが、今後もこのような講演会を継続して開催してほしいとの声が多く寄せられています。また、図書館業務に関するご意見・ご要望もいただいております。附属図書館では、このアンケートでいただいた忌憚のないご意見を日々の業務に活かして、これからも利用者の皆様方のご期待に添えるよう、努力してまいります。

なお、附属図書館では、第1回（平成16年度）以降毎回学術講演会の模様を録画し、DVDとして所蔵しております。館内（禁帯出：視聴覚室にて閲覧可）にてご視聴いただくことができますので、ぜひご利用ください。

（企画管理担当 橋本美佐子、 乗田優雅）



第48回特定非営利活動法人

日本医学図書館協会東北地区総会

標記総会は、平成19年10月19日（金）、弘前大学附属図書館医学部分館を当番館として弘前大学医学部コミュニケーションセンターを会場に加盟館7大学から館長（分館長）及び主任司書12名が参加して開催されました。

議事に先立ち蔵田分館長から開会挨拶があり、会則に基づき議長に当番館の蔵田分館長が選出され、出席者の自己紹介の後、議事に入りました。

報告事項、協議事項、承合事項等は以下のとおりです。

報告事項：①平成18年度東北地区会運営費収支報告 ②NPO法人日本医学図書館協会評議員会報告 ③各館の近況報告

協議事項：①第16回（H21）基礎研修会の実行委員長（開催館）及び実行委員の選出について ②第79回NPO法人日本医学図書館協会総会における東北地区からの提出議題について ③NPO法人日本医学図書館協会理事・監事候補者の推薦について ④NPO法人日本医学図書館協会次期地区評議員（館）の選出について ⑤次期当番館について

承合事項：①寄贈図書を受入について ②研究費で購入している外国雑誌の扱いについて

特に各館の近況報告では、電子ジャーナルパッケージの維持経費を確保するための方策について全学共通経費からの負担状況及びパッケージで利用可能な雑誌のprint版の中止状況や蔵書点検、開館時間の延長、図書館電算システム更新等について活発な意見交換が行われました。

また、第16回（H21）基礎研修会の実行委員長（開催館）に東北大学附属図書館医学分館を選出、次期評議員（館）に秋田大学附属図書館医学部分館を選出、次期当番館については青森県立保健大学附属図書館を決定し、会議を終了しました。



（医学部分館長 蔵田潔， 医学情報グループ 對馬芙由子）

総合文化祭報告

平成19年度総合文化祭

「古本もってけ市」 & 「DVD上映会」

平成19年度弘前大学総合文化祭が10月26日（金）～28日（日）に行われ、附属図書館では「古本もってけ市」と「DVD上映会」を企画しました。古本もってけ市では、図書館で不用となった図書を好きなだけ自由に持っていってもらおう（無料）という試みで、図書館1階玄関前で開きました。初日の準備段階から続々と人が集まり、3日間とも大盛況となりました。最初予定していた1,400冊に、途中で本を追加し、最終的には合計1,500冊程度引き取られました。小学生の子供達までやってきて「これ、タダで持って行っていいの？わーい、ラッキー！」とバッグに詰め込んでいて、果たして子供達に読めるだろうか…と余計な心配までしてしまったほどです。これだけ皆さんに喜んでもらえて、廃棄費用もかからないとなると、図書館にとってはありがたい限りです。今後も恒例化していきたいと思っております。

またDVD上映会では、青森県出身の映画監督五十嵐匠氏の作品3本（「HAZAN」「Sawada」「みすゞ」）を日替わりで上映しました。諸々の事情から、図書館入口からだいぶ離れた場所が上映会場となってしまいましたが、それでもたくさんの方々が観に来てくださいました。来年の文化祭でも何か面白い企画をやりたいと思いますので、是非ご来館ください。

（参考調査担当 長谷川友紀）



本学関係者の著作で、図書館に寄贈された図書と資料の一覧

平成18年1月～平成19年12月受贈分

学部名	寄贈者名	資料名	発行所	発行年	数	所蔵先
学長	遠藤 正彦	Endoglycosidases - Biochemistry, Biotechnology, Application	Springer Berlin	2006	3	本館 1 分館 2
人文学部	村松 恵二	カトリック政治思想とファシズム	創文社	2006. 1	1	本館
	長谷川 成一	「環境資源のワイズユースによる地域コミュニティの再生と持続可能な地域づくりに関する調査研究」報告書・個別調査編	環境省総合環境政策局	2007. 3	各 1	本館
	諸岡 道比古	啓示の哲学	燈影舎	2007. 10	1	本館
	Carpenter Victor Lee 佐々木純一郎	世界経済 = World economy	八千代出版	2006. 6	1	本館
	植木 久行	福士巖峰漢詩選	鷹城吟社	2006. 3	1	本館
		石原溪泉漢詩選	鷹城吟社	2007. 3	1	本館
	Philips, John Edward	Spurious Arabic : Hausa and colonial Nigeria	University of Wisconsin-Madison	2000	1	本館
	田中 一隆	懐疑的省察録	法政大学出版局	1992. 7	1	本館
		読みの快樂	法政大学出版局	1994. 10	1	本館
	山田 巖子	弘前大学人文学部宗教学民俗学実習報告書 1-3	弘前大学人文学部宗 教学研究室	2001 -2005	各 1	本館
		安代の民族誌 (弘前大学人文学部民俗学 実習調査報告書 1)	弘前大学人文学部民 俗学研究室	2007. 3	1	本館
	柑本 英雄	NorVision : 北海道沿岸地域の越境広域経営の展望	新潟県地域総合研究 所	2005. 9	1	本館
	関根 達人	津軽の近世墓標	弘前大学人文学部附 属亀ヶ岡文化研究セ ンター	2007. 3	1	本館
	柴田 英樹	進化する環境会計	中央経済社	2006. 7	1	本館
		粉飾の監査風土	プログレス	2007. 7	2	本館 2
	医療化社会 研究会	医療化社会の思想と行動	医療化社会研究会	2003. 8	1	本館
文化論ゼミナル	津軽の仕事着	弘前大学人文学部文化 財論ゼミナル	2006. 2	1	本館	
附属亀ヶ岡文化 研究センター	弘前大学人文学部日本考古学研究室研究 報告 2~5	弘前大学人文学部 日本考古学研究室	2005 -2007	各 2	本館 2	
理工学部	飯倉 善和	IDL と 3次元画像処理入門	共立出版	2007. 7	1	本館
農学生命 科学部	石川 隆二	メコン : 風土と野生イネ	勉誠出版	2003. 9	1	本館
		「三内丸山遺跡」植物の世界	裳華房	2004. 10	1	本館
	泉谷 眞実	青森農業の地域性と変動	北方新社	2003. 3	1	本館

学部名	寄贈者名	資料名	発行所	発行年	数	所蔵先
教育学部	Westerhoven, J. N.	After dark	Uitgeverij Atlas	2006	1	本館
		Kafka op het strand	Uitgeverij Atlas	2006	1	本館
		Een stoomfluit midden in de nacht	Antwerpen	2006	1	本館
	麓 信義	運動行動の学習と制御	杏林書院	2006.10	2	本館 1 分室 1
	面澤 和子	諸外国の教育課程 (2)	国立教育政策研究所	2007.3	1	本館
	東 徹	佐久間象山と科学技術	思文閣出版	2002	1	本館
		技術と身体	ミネルヴァ書房	2006.3	1	本館
		地域環境教育を主題とした 「総合学習」の展開	協同出版	2006.3	1	本館
		エレキテルの魅力 : 理科教育と科学史	裳華房	2007.3	1	本館
	山田 史生	寝床で読む『論語』	筑摩書房	2006.10	1	本館
	富田 晃	祝祭と暴力 : スティールパンと カーニヴァルの文化政治	二宮書店	2005.12	1	本館
今田 匡彦	The west meets the east in acoustic ecology	Japanese Association for Sound Ecology	2006	2	本館 2	
教育学部	日本教育大学協会研究集会報告集 2005	日本教育大学協会	2006	1	本館	
医学部・ 附属病院	石原 弘規	Fluid volume monitoring with glucose dilution	Springer	2007	2	本館 1 分館 1
	鍵谷 昭文	周産期母児の脈波学的研究	永井書店	2006.7	3	本館 1 分館 1 分室 1
	兼子 直	バルプロ酸の臨床薬理 : より良い使い方を求めて	ライフ・サイエンス	2006.9	1	分館
	北山 眞任	超音波ガイド下神経ブロック法 ポケットマニュアル	克誠堂出版	2006.11	1	分館
		超音波ガイド下区域麻酔法	克誠堂出版	2007.5	1	分館
	正村 和彦	第 21 回弘前大学医師会教育講演会	弘前大学医師会	2004.3	1	分館
		第 22 回弘前大学医師会教育講演会	弘前大学医師会	2004.6	1	分館
	今泉 忠淳	酒蔵 50 景	水星舎	2007.1	2	本館 1 分館 1
	中村 光男	臓腑からの魔法物質 : 臓外分泌研究と 有効物質バンクレアチンの歴史	ソルベイ製薬	2006.2	1	分館
	水島 豊	生き生き人生 : 健康に暮らすために	企画集団ぷりずむ	2006.5	2	分館 2
	中路 重之	D r . 中路の健康医学講座	弘前大学出版会	2007.1	1	分館
中澤 満	厚生労働科学研究研究費補助金特定疾患 対策研究事業網膜脈絡膜・視神経萎縮症に 関する研究報告書(平成 18 年度 総 括・分担)	厚生労働省特定疾患 対策研究事業網膜脈 絡膜・視神経萎縮症 に関する研究班	2007	1	分館	

学部名	寄贈者名	資料名	発行所	発行年	数	所蔵先
医学部・ 附属病院	千葉 正司	線描人体解剖学 増補第2版	考古堂書店	2006.4	1	分室
	宮越 順二	放射線医科学	学会出版センター	2007.3	1	分室
	弘前大学医学部 山岳部山の会	幻のリモ1峰から Yukshin Gardan Sar (7,350m)へ 登頂から20年後の報告書	弘前大学医学部	2007.7	1	分館
	保健学科	保健学科 FD 活動報告書：カリキュラム 改正作業とFDフォーラムの開催	医学部保健学科	2004.3	1	本館
国際交流 センター	サタ・ハン・ジョイ	My days, my drams	路上社	2007	1	本館
21世紀教 育センター	土持ゲ-リ-法一	ティーチング・ポートフォリオ	東信堂	2007.7	1	本館
名誉教授	品川 信良	不老会随想	品川信良	2007.4	1	本館
		私の時事随想 正・続	品川信良	2005 -2006	各1	本館
	篠邊 三郎	農業土木とは	みずほ出版新社	2005.12	1	本館
	村越 潔	青森県の考古学史	弘前大学教育学部考 古学研究会OB会	2007.3	1	本館
	松原 邦明	入会訴訟事件の法社会学的考察	松原 邦明	2007.7	1	本館
	金子 貞雄	古アイスランド語入門	大学書林	2006.1	1	本館
	松木 明知	弘前大学医学部麻酔科尾山教授 開講20周年記念業績集	弘前大学医学部麻酔 科学教室	1985.5	1	分館
		Endocrine response to anesthesia and intensive care	Excerpta Medica	1990	1	分館
		English writing for anaesthesiologists and other physicians	Kokuseido Publishing Co	1992	1	分館
		褐色細胞腫の麻酔	克誠堂出版	1994.12	1	分館
		完全静脈麻酔の臨床	克誠堂出版	1995.1	1	分館
		プロポフォールを中心とする 全静脈麻酔の臨床	克誠堂出版	1997.9	1	分館
		Tracheal intubation	Missouri Medico Dental Media International	1998	1	分館
		周術期におけるBISモニターの臨床応用	克誠堂出版	1998.1	1	分館
		褐色細胞腫の麻酔 改訂第2版	克誠堂出版	1999.4	1	分館
華岡青洲の新研究		松木明知	2002.1	1	分館	
「ねぶた」：その起源と呼称	津軽書房	2006.1	3	本館2 分館1		

学部名	寄贈者名	資料名	発行所	発行年	数	所蔵先
名誉教授	松木 明知	華岡青洲と麻沸散	真興交易(株) 医書出版	2006.8	2	本館1 分館1
		津軽の文化誌Ⅲ	津軽書房	2007.4	1	分館
	田中 和夫	青森県の地震・火山史料 上・下	弘前大学理工学部附 属地震火山観測所	2005.12	各2	本館2
	齋藤 捷一	校長先生のおはなしです	津軽書房	2007.2	1	本館
元教授	山川 学而	遊びと学びの本質	津軽書房	2005.6	1	本館
弘前大学 柔友会	川村 眞一	弘前大学柔道部五十年の歩み	弘前大学柔友会	2006.6	1	分館
鵬桜会	町田 清朗	アントーノフカ	未知谷	2007.11	1	分館
弘前大学 出版会	弘前大学 出版会	What's new in hand and reconstructive surgery?	弘前大学出版会	2005	3	本館1 分館1 分室1
		手関節：用語と定義	弘前大学出版会	2005.10	3	本館1 分館1 分室1
		What's new in organ transplantation?	弘前大学出版会	2006.1	3	本館1 分館1 分室1
		養護学校 365days	弘前大学出版会	2006.2	3	本館1 分館1 分室1
		円分多項式・有限群の指標	弘前大学出版会	2006.2	4	本館2 分館1 分室1
		津軽の四季	弘前大学出版会	2006.3	4	本館2 分館1 分室1
		わどなど：ハッピー☆子育て支援ブック	弘前大学出版会	2006.3	3	本館2 分室1
		青森師範学校志	弘前大学出版会	2006.9	4	本館2 分館1 分室1
		サブリージョンから読み解く EU・東アジア共同体	弘前大学出版会	2006.9	4	本館2 分館1 分室1
		転換の時代の教師・学生たち	弘前大学出版会	2006.9	4	本館2 分館1 分室1
		手作り CPU	弘前大学出版会	2006.10	4	本館2 分館1 分室1
		市民のための老年病学	弘前大学出版会	2007.1	4	本館2 分館1 分室1
		周縁地域の自己認識	弘前大学出版会	2007.2	4	本館2 分館1 分室1
		テレマークスキーレッスン	弘前大学出版会	2007.3	4	本館2 分館1 分室1

学部名	寄贈者名	資料名	発行所	発行年	数	所蔵先
弘前大学 出版会	弘前大学 出版会	知能機械実験Ⅰ・Ⅱ	弘前大学出版会	2007.3	4	本館2 分館1 分室1
		知能機械システム工学実験Ⅱ	弘前大学出版会	2007.3	4	本館2 分館1 分室1
		しなやかな小学校の先生をめざして	弘前大学出版会	2007.3	4	本館2 分館1 分室1
		基礎物理学実験の手引き 平成19年度版	弘前大学出版会	2007.3	4	本館2 分館1 分室1
		臨床内分泌・代謝学	弘前大学出版会	2007.3	5	本館2 分館2 分室1
		地域振興と整備新幹線	弘前大学出版会	2007.5	4	本館2 分館1 分室1
		青森県のフィールドから	弘前大学出版会	2007.9	4	本館2 分館1 分室1
		未踏峰に挑む	弘前大学出版会	2007.9	4	本館2 分館1 分室1
		理工系学生のための数値計算の理論と実際 改訂第3版	弘前大学出版会	2007.9	4	本館2 分館1 分室1
		基礎物理学実験の手引き 平成19・20年度版	弘前大学出版会	2007.9	4	本館2 分館1 分室1
		Dr. 中路の健康医学講座	弘前大学出版会	2007.10	2	本館2

ご惠贈ありがとうございました。本館所蔵分は、附属図書館2階の「本学教員等新刊著作物」コーナーで展示紹介した後、図書館の蔵書に加え、広く活用させていただきます。今後とも、図書館資料の充実を図るため、教員の皆様のご協力をお願いいたします。



弘前大学附属図書館報「豊泉」第27号

発行日：2008年3月1日

発行／弘前大学附属図書館 〒036-8560 青森県弘前市文京町1 TEL 0172(39)3162

編集／弘前大学附属図書館広報委員会

委員長 正村和彦（館長・医）

委員 蔵田潔（分館長・医） 内海淳（人文） 柴正敏（理工）

五十嵐輝雄（学術情報部） 中田晶子（学術情報部）

長谷川友紀（学術情報部） 對馬芙由子（学術情報部）

標題の「豊泉」は、明治9年の「仏国学制」付録上巻中の「人智ヲ広ムルノ豊泉アリ」の文に基づき、
松原邦明名誉教授命名 題字：藤原楚水編「書道六體大字典」（三省堂）より